

# もう一つの「栃木」

先人の苦勞は計り知れない



版画：小口一郎「鉍毒に追われて」より

栃木開基開校七十周年記念

栃木のあゆみ

# 一、栃木部落の始まり

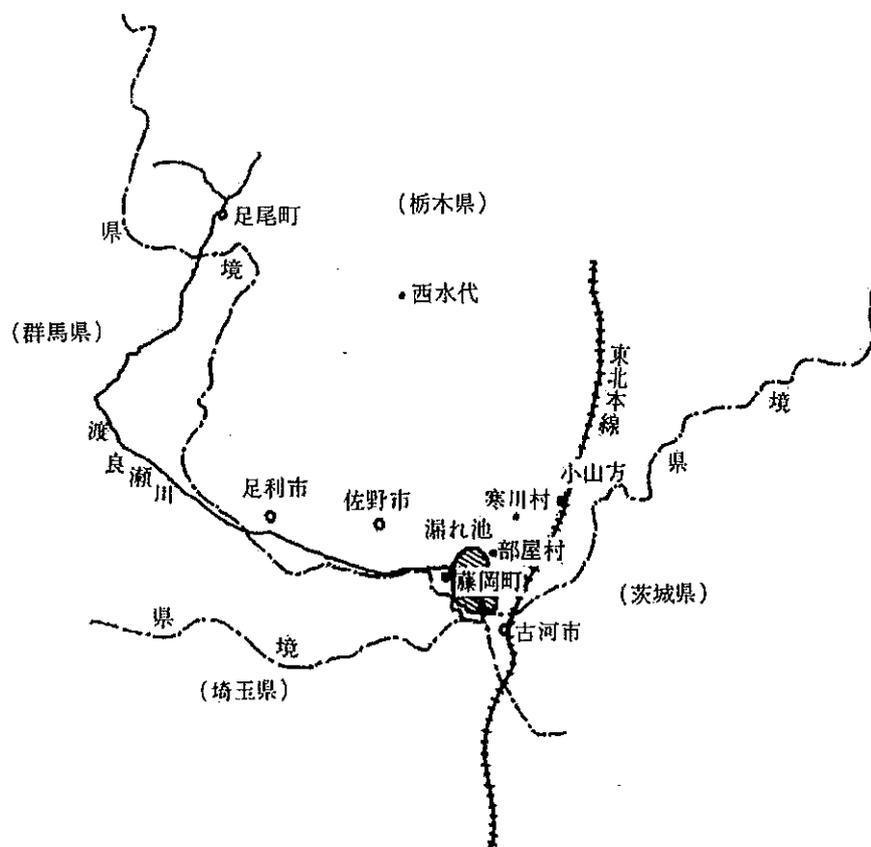
## 1、入植

### (1) 第一次入植

栃木部落は、明治四四年(一九一一年)、栃木県下都賀郡南部八か町村の足尾銅山鉍毒被災者六六戸、第一次集団移住者によって開拓が始められた。この集団移住には、次のような罹災的背景があった。

#### 一、栃木部落のはじまり

栃木県下都賀郡足尾銅山の採鉍精練による鉍毒は、関東平野を貫流する利根川の支流である渡良瀬川に放流されていたが、洪水のたびに鉍毒の汚水が氾濫し、魚類や農作物にいちじるしい被害を及ぼし、農民の生活は極度に困窮していた。加えて、明治四三年八月、関東地方を襲った大洪水は、渡良瀬川沿岸の農民を致命的惨状に追いつめた。当時の栃木県選出代議士田中正造氏は、これを足尾銅山鉍毒事件として、一〇数年にわたって政府と鉍山主古河市兵衛に抗



議し続け、遂に、明治三四年一月、明治天皇が国会開院式に臨まれた時、この実状を直訴した。このことにより、谷中村に土地収用法が発動され、強制買収、更に、強制立退きが執行されて、事件はまがりなりではあったが、急速に解決をみたのである。

そこで、栃木県庁は、罹災者の救済対策として、谷中村を立退いた一部の農民と鉱毒水害を蒙った下都賀郡南部八か町村の人達、又、一般の人達を含め希望者を募って北海道移民を斡旋したが、これは、たまたま北海タイムス記者渡辺常次氏が、同県下部屋村において北海道開拓移民を募集していたのに同調したものである。

こうして、瀬下六右衛門を団長とする六六戸二四〇余名（二一〇名ともいわれている。）は、北海道鋸沸村サロマベツ原野に集団移住が決定し、明治四四年四月七日、栃木県庁の鈴木、星野、浜野ら属官、下都賀郡役所より、大貫、丸井、椎名の各書記、日本赤十字社栃木支部より大久保医師と看護婦二名が連れ添い、青



大雨が降ると川となる  
足尾銅山精練所附近

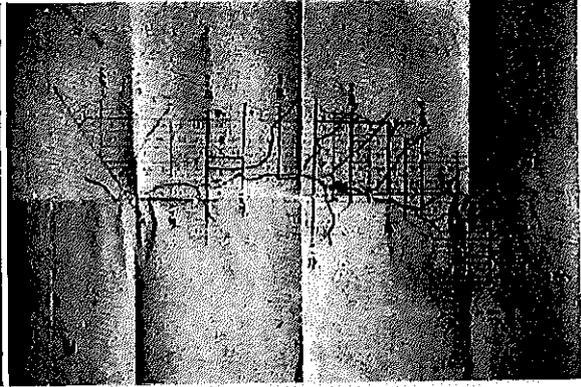
函連絡船内での火事にあいながら、二二日に網走線（現在の池北線）で陸別駅に着き、このあと貨物列車で野付牛（現在の北見市）にきた。途中、工事のため脱線事故をおこしたりしたが無事到着し、更に、留辺蘂までは、道庁で仕立てた駆遣の馬籠で来ている。しかし、ここに来る迄に落伍者などが出て、当初の人数を相当割っていたといわれる。

留辺蘂から約一二キロの刈払いの、しかも、雪で覆

## 一、栃木部落のはじまり



着手小屋



区画割

われた山道を年寄りや幼い子の手を引きながら、わずかの家財道具をたずさえ、現在の佐呂間町字若佐（現在の武士）にたどりつき、付近の民家に分宿している。

移住者達は、入植の手始めとして、まず、武士の小学校（現在の若佐小学校）内に事務所を設け、そこから先の四キロ地点に熊笹でふいた三棟の着手小屋を作ってもらい、入植するその年の秋まで、そこで共同生活をしながら準備等を行ったのである。その着手小屋は、今の一七線から一八線の間にて建てられていた。

入植する土地は、すでに、北海道庁で二〇〇余に区画割されていて、移住者達が栃木県小山駅を出発する前には、各々が入地する場所を番号で知らされていた。しかし、北海道庁の方では、移住者を現在の栃木地区に密居宅地として三カ所（現在の第一七、二一、二五線）造成し、集団居住をさせる計画だったらしい。だが移住者達は、当時すでに街を形成しつつあった隣町の留辺蘂（当時武華村）に近いことと、栃木県での水害の経験と飲料水が得られやすい高台地区を求めて、第一五線（現在の佐呂間町字若佐を起点とする。）から第二七線、とりわけ第二一線から第二七線までに集中的に入地している。

第一次入植時における移民団の状況を、栃木県足利市助役大貫権一郎氏

(移民団の責任者)は、明治四四年の日誌に、次のように記している。

- 四月七日 白河駅。汽車中徹宵。
- 四月八日 一ノ関で休憩。
- 四月九日 午前九時、青森発。船、会下山丸。  
船火事。大混雑。午後一時一五分発船。午後五時一〇分、函館着。海、波平穩。(群馬団体八  
三戸虻田郡狩村シクベツ原野へ。)
- 四月一〇日 狩木駅にて、群馬団体と別れる。汽車点灯後、札幌着。栃木県出身者、事務官他の歓迎。  
夜一二時間後旭川着。列車泊。
- 四月一日 午前六時、旭川発。午後四時頃池田着。分宿。幹部四竜館泊。
- 四月二日 午前三時、池田発。午前九時、陸別駅着。(活気あり)野付牛有志、当地迄出迎える。休憩  
後同駅発。徐行・停車ヶ所多し。貨物列車にムシロ。分乗。午後三時、野付牛着。各民家分  
宿。幹部、梅原旅館泊。市街泥濘甚だし。
- 四月一三日 早朝、野付牛発。青年会員、一〇輛の馬車寄贈。老幼者、馬車分乗。他歩行。途中雪どけ。  
泥濘、膝を没する程度に及ぶ。歩行困難。相内部落で歓迎。国旗(屯田兵村)全員感泣。午  
後四時、部落民家分宿。夜降雪。娘を子守りに取り決めた者もいた。今泉勇次郎の娘、イシ  
もその一人。八歳の妹サダは、常呂へ子守りに。千葉イシ一二歳は相内へ。留辺薬、二尺以  
上の雪で泣き出す者、帰りたいといひ出す人多勢。

一、栃木部落のはじまり

○ 四月一四日 午前七時発。老幼者、馬車に分乗。第三区相内出發。道路泥濘。第四区、留辺薬より約三里は峠。一方山岳。一方溪谷。危険、困難想像外。融雪中の雪路歩行容易ならず。足跡あやまれば、二尺〜三尺の雪中に両脚没し、両股にて止まる状況。(この道は、明治二四年、網走集治監の囚人が血を流して作ったもの) 峠鎖塚 武士(現在の若佐) 着(行程九里) 各民家に分宿。月光を仰ぎ午後九時頃着。

○ 四月一五日 小学校内事務所。諸般の事務。幹部学校内宿泊。

○ 四月一六日 午前八時出發。移住地実査。学校より近きは一里。遠きは三里。仮小屋三棟設けた。子どもも勾配につれて転下状態、啞然たり。小屋、雑木林を柱とする。ガンピの皮で屋根、周囲張り。寢床の下、樹葉。移住地への道路、雪中山路、カンジキ着用歩行す。積雪二尺〜四尺以上。天然大木、天空を蔽う。熊笹は、雪にしき伏せられ、深山に入りたるごとし。熊笹五尺〜六尺茂生して大熊の出没を感じさせる。

○ 四月一七日 学校内に起臥。毛布、蒲団で身を囲うも寒気強く安眠出来ず。

○ 四月一九日 洗顔水、ほとんど氷らんばかりの寒冷。頭髮を洗うも、櫛を入れる時、すでに氷となる。

○ 四月二〇日 毎日のごとく空曇るや直ちに降雪。

○ 四月二一日 仮小屋に移転。荷物開包、夫々配布。着用裏色表にしみ、着用できない状態。

○ 四月二二日 全部移住地仮小屋に移り、下記の団体規則を定める。

団体長 瀬下六右衛門

伍長 古沢丑之助(寒川村)

松本亀之助 (部屋村) 海老沼辰之進 (部屋村)

稲葉文之助 (部屋村) 大山 正次 (生井村)

田中鷹之助 (部屋村) 川島安太郎 (谷中村)

今泉勇次郎 (寒川村)

○ 四月二三日 早朝、引率者は関係書類を団体長に引渡し、移民に送られ万才を三唱し別れる。

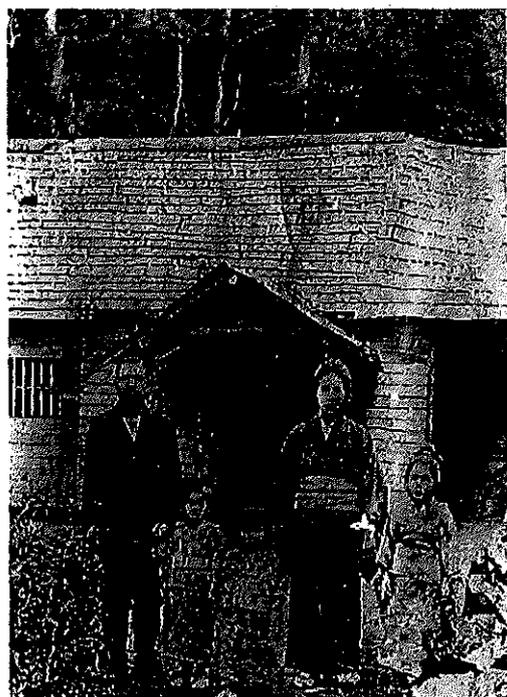
## (2) 第二次入植

第一次入植者が一年目にして早くも二〇戸の離農者(身軽な者)が出たため、その二〇戸の穴埋めのため、大正二年四月に、第一次北海道栃木開拓移民団の団長、瀬下六右衛門は、栃木県にいったん帰県した。そして再度移住者を募って、第二次北海道栃木開拓移民団とし、総戸数三二戸を引率して、第二二線から第二七

線にわたって入っている。

だが、その翌年の大正三年には、更に二〇戸の離農者と八名の除名者を出している。従って、移住者は、この年で、当初の人数の半分である約九八名に減っている。

第一次、第二次の入植者数は、共に、その戸数がはつきりしていない。中には、家族の名前で土地を取得したり、土地を取得したものの移住しなかった人もいた



団長 瀬下六右衛門の家

一、栃木部落のはじまり

番号	区分	戸主		二代目	三代目	出身地
7		佐瀬庄太郎	福庄吉			"
6		小林豊次	弘	幸治	部屋村	
5		川島平助	清	一平	谷中村	
4		今泉勇次郎	米次郎	太	寒川村	
3		石川音五郎	長次郎	喜久雄	藤岡町	
2		秋山弥蔵	(幸蔵)	義治	谷中村	
1		阿部利三郎	(武三)	信夫	三鴨村	

栃木団体名簿

17	古沢丑之助	英道	英順	寒川村
16	藤沼藤八	増蔵	義康	"
15	長谷川市五郎	福市郎		"
14	(猪瀬に養子)	芳郎		"
13	稲葉利兵衛			"
12	稲葉文之助	義晴	光与	"
11	松本亀之助	七郎	英亜記	部屋村
10	峯崎忠三郎	(辰蔵)	伸治	藤岡町
9	田中鷹之助	綸太郎		"
8	田中梅三	(祐栄)	信夫	"

からである。

しかし、第一次、第二次入植者の中から、正確にわかっただけでも、四八名の離脱者が出たということは、酷寒に馴れぬ辺地での開拓の労苦、困難がそうさせたともいえる。

移民団の中から、八名もの除名者が出たその理由、鉾毒流水で県下一番の被害があった谷中村の村長、茂呂近助氏が何故、団長にならなかったのかという疑問に、諸説はあるが定かではない。しかし、除名者の中に、再度、栃木県庁に補助をとという団長の意志に反対した人が含まれていたことは、事実である。なにはともあれ、移住者達は、開拓の労苦の中でも、望郷の念だけは忘れずにいたことに間違いない。この地を「栃木」と命名していることからそれがうかがい知ることが出来る。

38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18
篠原勝吉	篠原末吉	青木儀三郎	瀬下六右衛門	木村長三郎	桜井留吉	峯崎峯吉	永塚栄七	大島末蔵	大島留次	渡辺勘次	渡辺勝蔵	田中リタ	小林幸五郎	菊地森造	神原信一	柿沼利平	岡泉忠一郎	大島弥三郎	遠藤弥三郎	大出利八
チイ	貞次	三郎	武男	市六	国三郎	和一	浅吉	伊勢次郎	勝義	乙(勘次)吉	リタ	(妻田中)	惠三			ユキ		弥造	弥右衛門	(利三)一
			勉	美智伸			栄一									三世				
"	部屋村	部屋村	部屋村	谷中村	赤麻村	藤岡町	谷中村	部屋村	"	"	寒川村	"	"	"	部屋村	三鴨村	豊田町	部屋村	三鴨村	不明
59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39
川島平三郎(平助の兄)	福田太平	渡辺長八	茂呂近助(谷中村村長)	三戸部きくじ	田中太郎右衛門	進上徳次	おさもとかへい	渡辺昇	田中雄一郎	落合治三郎	大塚忠治	大橋喜之助	海老沼辰造	稲葉利助(文之助の弟)	稲葉祐松	綾辺浪之助	(阿利三郎の兄)	佐山亀太郎	渡辺乙七吉	篠原文次
			蔵一郎													金一郎	(秋山兼夫人)	(貫一)	駒吉	
			広																	
谷中村	日光町	部屋村	谷中村	不明	不明	藤岡町	不明	"	部屋村	生井村	赤麻村	"	"	"	"	部屋村	三鴨村	部屋村	寒川村	"

一、栃木部落のはじまり

80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60
川島(安太郎の弟)	川島安太郎	石田常吉	小川トメ	小川ト蔵	大谷梅三郎	阿部吾市	秋山ヤス(川島安太郎の妻)	田中其吉	綾部金一郎	池田常吉	木村喜市	木村市右衛門	茂呂テツ	杉本正一	岡部新衛	柴崎峯次	関口兼吉	関口弥五郎	川島喜平	柴崎峯吉
								庄吉	初太郎	周吉	市右衛門	セキ			伝次郎		平次			
															弘		六			
		谷中村		生井村	部屋村	三鴨村	谷中村		部屋村	水代村			谷中村	部屋村	谷中村	部屋村			谷中村	部屋村

91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81
瀬下字一郎	渡辺久五郎	渡辺国一郎	鳩山政治	渡辺勝太郎	藤沼万吉	藤沼トヨ	田中半蔵	田熊福松	篠原ウル	篠原重太(勝吉の弟)
(	(	(名儀のみの、渡辺駒吉関係か)					留吉			
)	)									
					不明	寒川村		部屋村	藤岡町	寒川村

出身地を町村別に分けて見ると、部屋村四一戸、谷中村一七戸、藤岡町五、寒川村七、三鴨村三、赤麻村二、生井村三、豊田村一、水代市一、不明五、合計八八戸となる。

現住所を見ると、栃木部落に四戸が残り、離農者は同じ佐呂間町内に七戸、網走支庁内に一二戸、他の道内に一四戸、本州では栃木県内に一七戸、古河と野田に九戸、他五戸、その他は不明となっている。

栃木県 人戸数 動態

年号	移住	転出 前期の 年からの 期間中	現在数	部落全体
明四四	第一次 六六戸	二〇戸	六六戸	六六戸
〃四五	第二次 三二戸	二〇	七八	大正年間 に最高 一六〇戸
大二			五八	
〃三			三七	
〃一三			三六	
昭三				

〃二二	〃一九	〃二二	〃三〇	〃三五	〃三八	〃四五	〃五六
二	九	六	一	五	九	九	九
三四	二五	一九	一八	一三	四	四	四
一〇二		九五	一一〇	八六	三五	三〇	三〇

(3) 他県より入植

栃木団体の入植と前後して明治四四年の六月から一〇月にかけて山形県から鈴木鉄太氏、愛媛県より高瀬市太郎氏が入植している。

又、明治四四年から大正二年の三年間には相当数の入植者はいるが入植しても二、三年乃至五、六年経てから本町に入籍届を出したり、入籍しないまま他へ転出したりして入植年、入植者名が不明なのが殆どである。

(他県より入植した人達 ※入植年、県名、名のないものは不明のもの)

一、栃木部落のはじまり

これらの入植者は、栃木団体が国から補助を受け、出発前に、入地する場所、つまり何線の何番に入地することが知らされていたのと違い、一定の条件下のもとで入って来ている。又、農業経験者が大方であったことも特徴的である。

他県から入植した者の旅費や入地してからの諸経費の殆どは、個人負担だった。ただ入植にあたっての補

氏名	県名	入植年	備考
一色 勇助	愛媛		
黒川 重助	"		
今井 松次郎	"	大正一〇年	
高瀬 市太郎	"	明治四四年	
鴻之池 蔦次郎	"	大正二年	
中井 平吉	福島		
遠藤 勇作	"		
天野 清六	"		
相良 宣重	"		
松川 国造	岐阜		
菅原 岩松	"		
上村 小十郎	"	大正二年	
山下 福松	"		
鈴木 鉄太	山形	明治四四年	
青木 留吉	"		

鈴木 徳松	石川	大正二年	
畑尾 愛次郎	岡山	"	
牧野 仙太郎	熊本	"	
山口 長作	富山	"	
安部 辰四郎			
檜垣 和夫			
田中 利八			
前田 兵三		大正二年四月	
及川 春三郎	宮城	大正三年一月	
菅野 肥治			
添田 茂右衛門			
藤原			
古井戸 由松			
竹内 治部兵衛			
江部			
関藤			

助として国からあったのは、味噌、醤油、麦等の一年間の現物支給と、この時代の北海道の内陸部、北辺は人跡未踏の地だったこともあって、北海道開拓者に汽車賃の割引きをする程度のものであった。

入植するためには、まず、出身県から移住証明書を出してもらわなければならなかった。その移住証明書は、北海道庁若しくは支庁に提出し、そこで初めて図面上であったが入地する場所を指示されたのである。

そして、開墾が五町歩（約五ヘクタール）以上されていなければ、入植者の賦与地にならないという条件も課せられていた。又、栃木団体の入植者には土地を抵当に入れ、生活、営農資金として、多額の借財をしたものの、返済出来ず、土地を没収される人がいた。又、この期の人達の多くは、「現物返し」といって、種子等の融通し合いをしていたがそれが出来ず、自分の土地を離れて行った人もいたという。これらの人々は、馴れぬ厳しい開墾に耐えかねて離脱、落伍して行ったのである。中には、入植して一か月も経たないうちに立ち去る人もいたという。

他県からの入植者には、このような土地を買いとった人の小作人として、或いは、農業や土地を放棄する人から個人的に払い下げを受け、入地する人が多くいたという。

しかし、入植した他県人も、開拓への執念については、栃木団体の人々にひけはとらなかつた。

山形県出身の鈴木鉄太氏も、その一人であった。大正元年に、武士（現在の若佐）の農家より薄荷の根を買い入れ、すでに薄荷の試作を始めているのである。

第一次、第二次移住者の職業（判明している人のみ）

（この表の農業外の職業は、農業との兼業である。）

一、栃木部落のはじまり

で乗った船が火事になり、荷物などに破損があった。函館に着いて小樽回りで帯広―池田―置戸を通過して北



千葉イシさん

明治四四年四月上旬、栃木県下都賀郡寒川村大字押切を、両親と私を含めた子供四人の六人家族は、北海道移住団として郷里を後に出発し、小山駅に集合する栃木県六六戸の団体と、群馬県の団体（胆振に入植）の二つの移住団は、県庁、役場の役人、看護婦二名に付添われて北海道に向かった。途中、青森港

開拓の思い出

千葉 イシ

又、家業の分は、家業としておこなっていたが、職人として勤めていたかは不明である。

藤沼 藤八	長谷川 市五郎	稲葉 利兵衛	猪瀬 長重	稲葉 文之助	松本 亀之助	田中 鷹之助	佐瀬 庄太郎	瀬下 六右衛門	小林 豊次	氏名
"	"	"	"	"	"	"	"	"	部屋村	出身村町
"	労務者	粕屋	労務者	"	"	"	農業	役場収入役	桶屋	職業

阿部 利三郎	田熊 福松	大島 留次	渡辺 勝蔵	古沢 丑之助	今泉 勇次郎	大島 末蔵	菊地 森造	神原 信一	大島 弥三郎
三鴨村	"	"	"	"	寒川村	"	"	"	"
機織業	大工	焼物業	製米業	労務者	建築士	焼物業	機織業	菓子屋	焼物業

石川 音五郎	藤沼 万吉	松本 正一	渡辺 長八	大島 喜之助	綾部 浪之助	篠原 勝吉	池田 常吉	岡泉 忠一郎	遠藤 弥三郎
藤岡町	"	"	"	"	"	"	水代村	豊田村	"
醤油醸造業	農業	労務者	農業	綿屋	"	農業	畳屋	農業	床屋

茂呂 近助	岡部 新衛	関口 兼吉	川島 平三郎	木村 長三郎	永塚 栄七	川島 平助	秋山 弥蔵	福田 太平	峯崎 忠三郎
"	"	"	"	"	谷中村	"	谷中村	日光町	"
谷中村村長	"	"	"	農業	醤油醸造業	"	農業	蕎麦業	"

見（当時野付牛）に入った。北見から相内三区迄馬車で来て、ここで一泊する。相内から留辺蘂までまた馬車に乗り、留辺蘂からは、まだ雪があるため馬櫓を利用した。馬櫓には、年寄りと子供だけで、大人は歩いて若佐（当時武士）に夜遅く着き、それぞれの家に分かれて泊った。私達家族は、武士の青木与雄さんの家に一週間程泊った。四月二日は栃木に入植する日だった。今の栃木橋のところに、大きな桂の木の風倒木があり、それを橋にして川を渡って栃木に入った。私達が入る家は、着手小屋といって、若佐（当時武士）の人達が今の一七線と一八線の中間に建ててくれた共同住居だった。

雪も融けた六月には、共同住居から通って自分の土地の開墾にはげんだ。そして、開墾のかたわら建てた家に移り住んだのは秋頃だった。私の家の隣が渡辺勘次さんの家で、渡辺さんでは、大きな木を挽いて板をつくり、風呂を造っていた。私達家族も、よく入れてもらった。

入植当時、若い働き手のある家は、開墾もどんどん進んだが女や子どもの多い家は、大木を切り倒すことも慣れていないので大変苦労していた。入植した年は、種子を蒔くのが六月上旬頃となり、蕎麦、馬鈴薯、南瓜などを植えた。次の年から麦、イナキビ等を蒔いたが、食糧を確保するのがやっとだった。小遣は、冬の造材の除雪作業などに出てつくった。当時は、丸太の運搬も馬でなく、流送（武士川）で運んだ。川のふちに建てた家は、その丸太でよくこわされたものだ。

入植して間もなく、それも五月から十一月迄、私は相内三区の小口さんと言う家に子守りとして働きに出されました。内地から来て間もなくのことでもあり、また、北海道の言葉も充分わからず、一三歳と言えば、まだ子供だったから、本当につらい思いをした。

入植して三年目頃、私の家と古沢さんの家が共同で馬を一頭購入した。その馬が開墾にたいへん役立って

## 一、栃木部落のはじまり

いた。耕作、抜根作業などに、どれだけ役に立ったかわからない。この馬の購入は、入植した人達の中では、一番早かったと思う。

入植した年は、食糧も充分収穫できず、家族の多い家はたいへんだったろうと思う。

土地を担保に入れて食糧の確保に懸命だった。今の中園方面に、よく出かけたようだった。若い人達は我慢出来ても、老人や子供はかわいそうだった。当時は、米があっても買えず、主に燕麦、イナキビが常食で、麦さえも充分に食べられなかった。そんな生活でも、楽しみと言えば盆踊り（八木節）だった。踊って、苦労を一時、まぎらわせていた。今思えば、現在の生活は、まるで天国のようだと思う。

千葉イシさんは、両親（今泉勇次郎さん）と共に、一二歳で栃木に移住し、現在は八一歳という高齢にもかかわらずご健在である。

## 2、道路開削

### 四一号道路開削

武士（現在の若佐）から栃木までの道路に四〇、四一、四二号の三幹線道路がある。

しかし、現在利用されているのは栃木部落の中心を直線上に約六キロメートル走る四一号線幹道路と、四〇号幹線、四二号幹線が一部牛乳集荷道路だけである。

この幹線道路は、国道三三三三号線から右に直角に折れ、一五線を起点に、一線間約六〇〇メートルの二三

## 一、栃木部落のはじまり



開拓当時の鋸

る。

土層そのものは、堅いが、鋏、スコップで充分、耕すことができる。しかし盤層状が地下四〇〜五〇センチメートルのところにあるので、透水性が悪く、灰色斑紋鉄、マンガン錆が多くみられる。酸性度の強い地質が殆どである。

### ③ 開拓

開墾する土地に入ってまずしなければならぬことは、住居を建てることだった。樹木を切り倒し、掘立式の柱とし、大木を割って作った板や長桁、松枝葉を縛って板壁にした。屋根は、桂、樺の樹皮、或は、熊笹で葺いた。それらを打ち付ける釘もないありさまだったのでブドウ、コクワのつる、ニレの樹皮で結びつけたりした。建てられた住居は、掘立式の三角小屋（拝み小屋）が殆どであったという。

土地の開墾は、大木を切り倒すことと、熊笹を刈りとることから始められた。今では考えられないことだが、当時、木材は商品として売れず、従って、入植した移住者達にとっては、一番の厄介物だった。

入植した殆どの移住者達は、栃木県では、兼業農家であり、人跡未踏の地に入って開拓するということは全くの素人であった。その上、開墾のための道具といっても、鋏、鎌、鋸しか持たなかったのだから、その苦勞は、なみたいていのものではなかった。

大木を切り倒すと、手や、てこで転がし、一箇所に集め、それに枝等を積み重ね火をつけて燃やした。その黒煙は、部落を覆い夜となく昼となく続いたといわれる。

その頃、山火事が頻繁と発生したのも、それらの走り火、残り火が原因ともいわれている。

大木を切り倒して燃やした後は、笹、雑草に火をつけて畑にした。とにかく、畑にするためには、余分なものをすべてを焼き払うより方法はなかったのである。

入植・開墾・蒔付・収穫までは、わずかの自分の持ち金と、国の補助金で武士・中園の農家や留辺薬、遠くは常呂、湧別まで行って、農具、種子、米、塩、味噌、醤油等を買って来て農作業にはげんだといわれる。

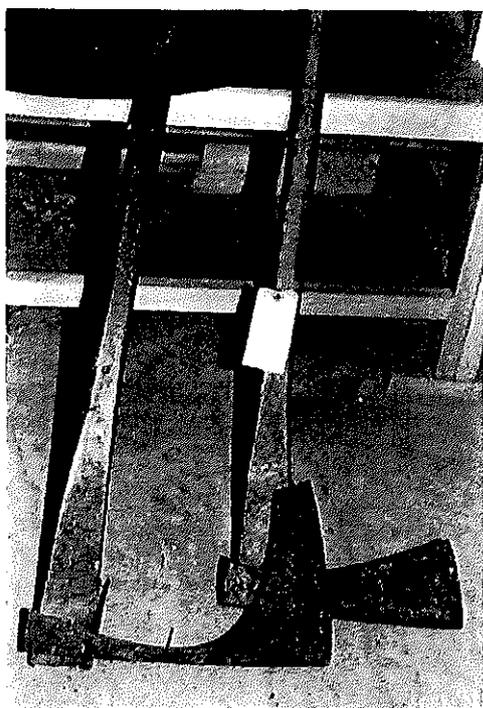
当時は、今のようには、交通機関はなく、徒歩が殆んどであった。店といっても、若佐（当時武士）には、中西商店が一軒、佐呂間市街（当時鋤沸村）に三軒しかなく、商品は、用が足せるだけのものはなかったらしい。

使い慣れない農具で、焼跡に畝を掘り、馬鈴薯・南瓜、蕎麦、トウキビ、イナキビ、菜種、豌豆等を植えたが、収穫した作物の大方は出荷までいかず、自家用の食糧になった。入植した年の一年間は、手当として

#### 開拓当時のマサカリ

家族数に応じた麦、味噌、醤油の現物支給はあったが、当時の主食といえは、麦又は蕎麦であった。馬鈴薯、南瓜、トウキビも時折り主食になったといわれる。

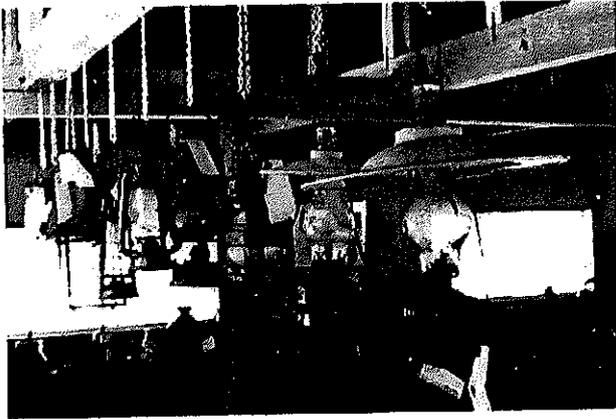
武士川には、山女魚、ウグイ、ドジョウがとれ、乾燥して冬の味噌汁のだしにしたり、いくらでも採れた鱒、鮭を塩漬けにしたりして、冬場の食糧にあてていたようである。勿論、フキ、ワラビ、キノコも食膳にのった。



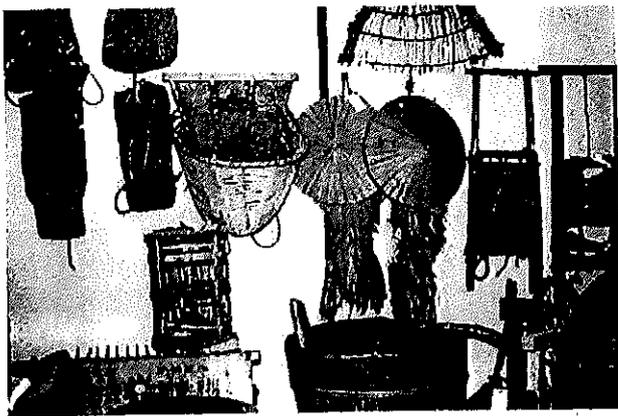
一、栃木部落のはじまり



つまご わらじ



開拓当時の灯火具



みの筥 背負農具

しかし、米だけは、容易に食べられなかったようである。正月とか、盆、病気以外は、経済的にも食べる  
ことができなかつたという。

大正二年の降雪による大凶作の時には、経済的にも、収穫にも大打撃を被つたといわれる。

植え付けたものの、当座の食糧がなく、いったん植えた種芋を、新芽が出るのを待つて掘り出して食べた  
り、種芋の皮をできるだけ厚く剥き、その部分だけを植え、残りを食糧にするなどして飢えを凌いだ人もい  
たという。

夜は、手ランプ（カンテラ）、百刃ローソク、土間に造つた炉の焚火で明りをとつたという。その焚火は、  
熊等の野獣の襲来を防ぐのに役立ったらしい。住む家の中は、畳の替りに筵を敷いたり、寝床には、干草を

敷きつめて寝起きした人もいたという。

この様な貧しい生活の中で、家族が肩を寄せ合って過ごした夜を偲ぶ時、先達者の労苦を推し測る術を知らない。

しかし、開拓にも、生活にも、このような悪条件があったにしろ、それぞれの入植移住者達は、開墾に必死に打ち込んでいたのである。

その例として、大正二年に、古沢丑之助、今泉勇次郎の両氏が共同で農耕馬を購入している。農耕馬を購入したのは、栃木ではこれが最初といわれている。

明治四四年から大正二年迄のこの期の人達は、自給自足というよりも、開墾するということだけで精いっぱいではなかったかと考えられる。

#### 開拓の想い出

阿部 文三（七八才）

当時一緒に入植して来た隣りの家の七〇歳の老人が病気になる。その老人の家庭は、息子と孫だけで、女がいない男ばかりの家庭であった。

家は、狭い堀立小屋で出来ていて、冬は、雪や風が吹き通しだった。

老人が病気になるたといっても、医者はいない。薬もない。又、食べさせる米すら一粒もないありさまだった。余命幾ばくもないと知った隣の人が、イナキビのボタ餅を見舞にと持って行ったら、その老人は、床の中で「一寸、遅うございました。」と言って息を引きとったと言う。

この話を聞いた当時の人達は、気骨のある爺さんだと言って、語り草にしたと言う。私には、最奥の地に

一、栃木部落のはじまり



特別教授場と当時の子供達

入植した開拓者の悲哀として、今だに頭に残っている。

阿部文三さんは、阿部利三郎さんの三男で大正七年、一五歳で栃木に移住している古老である。

4、文化のはじまり

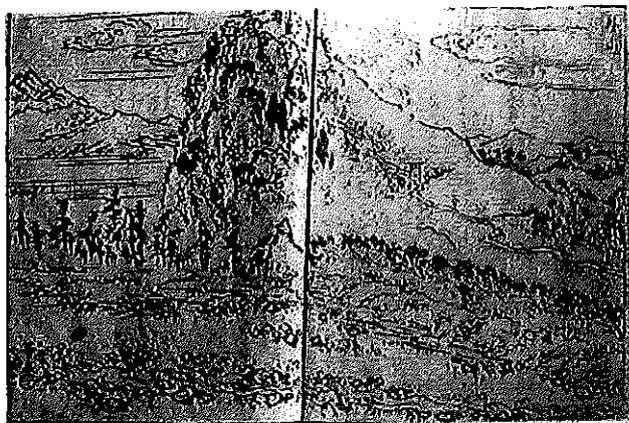
(1) 学校（創立時代Ⅱ大正二年）

明治四四年と大正二年に栃木団体の入地を見、その後、他県からの移住者も後を絶たなかったが、大正二年、つまり入植して三年目には、農業を基盤とする生活が一応安定し始めていたことから、入植者たちは子弟教育の必要性を感じ、学校創立のため奔走するのである。

栃木小学校の沿革誌に、その時のことを次のように記している。

○ 大正二年六月一日。設置。「当字栃木一九線二四五番地栃木神社拝殿ヲ以テ仮教室ニ充テ下佐呂間尋常小学校所属栃木特別教授場トシテ設置認可アリ全年七月七日授業ヲ開始シタルガ本校教育ノ濫觴也、当時敷地二段歩ハ栃木部落川島平助氏ノ寄付ニナリタルモノナリ而シテ本校舎ハ元來栃木神社拝殿

一、栃木部落のはじまり



栃木県日光山多聞寺の所在地図

台宗日光山多聞寺

所在地 北海道常呂郡佐呂間町字栃木

寺の由緒と沿革

(3) 寺院

・ 拜殿建築 昭和八年七月

・ 本殿屋根葺替 昭和一八年

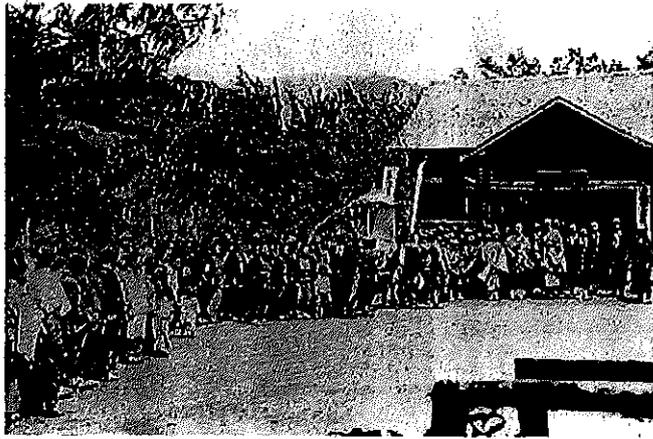
・ 拜殿改修 昭和三九年

日光山多聞寺は、大正二年、本町字栃木に遷座するまでは、栃木県日光山内御堂前に、日光輪王寺の末寺としてあった。

開基は、弘法大師が日光嶺に御巡錫のおり、大谷川、稻荷川合流外山の麓に、毘沙門天像を自刻して堂に祀り、開教したのが始まりと言われている。そのころより日光山多聞寺を号していた。

徳川家康公は、当寺を殊のほか尊信帰依し、永代寺領二百石を与えたといわれる。従って当寺は、徳川家康公の御朱印付の寺院として別格の処遇を受けていたことになる。

しかし、当寺は、これまでに二度の災難にあっている。一つは、天知年中の稻荷川増水による流失、二つには、火災による明治一九年の堂宇



景全寺多の當時迎奉靈神門沙昆

の焼失である。そして、本町字栃木に、遷座勧請の運動が起こるまでは、廃寺同然になっていた。それを再建し、遷座の先駆的役割りを果たしたのは、栃木県下都賀水代村報恩寺住職林田諦師その人であった。師は、明治四五年六月、栃木県団体移住の当地に慰問布教に訪れている。師は、日夜、開拓に労苦をかきねている移住者達を見聞し、その人達のために寺院を建立しようとして、ひそかに決意してその十月に離道している。七才の老体に鞭打って遷座と再建、移住者の信仰のために日光本山に赴き説いてまわったが志半ばにして他界している。しかし、その熱意に対して、天台宗本山比叡山延暦寺座主より、最高功労賞である梶井三諦賞、袈裟が下賜されている。やがて、日光一山会議の結果、日光山多聞寺の再建と移転が決定された。時に、大正二年四月であった。本町字栃木に本堂が落慶したのは、それから三年後の大正五年五月二二日である。住

職は、千葉県山武郡成東町宝聚寺の正田亮秀師が本山の特派として、大正九年六月まで在寺している。その後、檀徒総代瀬下六右衛門、田中鷹之助、阿部利三郎、篠原末吉の四氏が檀徒一同を代表して、延暦寺本山に住職派遣について接衝したが得られず、止むなく、移住者の一人、古沢英道氏を日光本山で学ばせ、大正一二年に本町字栃木の多聞寺の住職につかせている。

#### 檀信徒の信仰とその概要

創建時は、栃木部落は勿論、本町、湧別、留辺蘂の全域に亘っており、数は、三〇〇戸余りだったといわれる。

なお、布教、宣教活動の一つとして、武士（現在の若佐）の市街に観

一、栃木部落のはじまり

音堂を建立、如意輪観世音を安置して、月例十日を縁日と定めていた。

創建時の寺院組織配置

- 檀徒総代人 阿部利三郎他三名
- 寺世話人 田中梅三他九名
- 馬頭観世音世話人檀信徒代表 川島平助、守口勘治他一五名
- 武士市街観音堂世話総代人 稲葉トシ他三名
- 会計 木村長三郎

多聞寺の宝物（栃木県日光山より伝わる宝物）

- 昆沙門天像（立像 丈八寸 木像）

由緒（多聞寺控帳より）

弘法大師東国地方御巡錫の砌り日光山に上り、東北隅に一孤峯有り外山と名付く。弘仁一一年七月二六日昆沙門天神靈に感応有り、て、弘仁一一年九月七日自ら昆沙門天王の聖容を自刻し、外山の絶頂に安置し、由来一千二百有余年、多聞寺の本尊として今日に及ぶもの也。

- 釈迦如来（座像 丈七寸 木像）

由緒（多聞寺控帳より）

日本仏教の門祖とも仰がるる伝教大師・即ち最澄上人（約千三百年前）、桓武天皇の命を受け、比叡山延暦寺を建立するに当り、大願成就の為、釈迦、弥陀、薬師如来の三尊仏を自刻し、比叡山に安置す。その先端を以って別に釈迦像を自刻し、守護神となせり。後日、日光山に伝わり多聞寺に安置せるもの

也。(座像の御額の白光はダイヤモンド入りのため)

○ 徳川家康公の御納骨入木像(丈八寸座像) 由緒(多聞寺控帳より)

○ 徳川家康公薨去の直前即ち元和四年二月一八日、只今の皇居江戸城紅葉御殿において慈眼大師(天海大僧正)之を自刻し、同年四月一七日、家康公薨去と同時に靈写御納骨申し上げしもの也。

○ 明治天皇御尊儀(丈七寸)

由緒(多聞寺控帳より)

当多聞寺は古来より幾多の変遷は有ると言えども、別格一等寺としての位格を有するため、畏くも天皇崩御(明治四五年七月三〇日)と共に宮内省より御下賜・安置奉祀を命ぜられしもの也。

○ 善光寺如来三尊仏(丈一尺)

由緒(多聞寺控帳より)

作者不詳なるもその昔、信濃国善光寺より御分身を受け、当寺に古来より安置せるもの也。

○ 馬頭観世音(全像 丈一尺二寸 立像)

由緒(多聞寺控帳より)

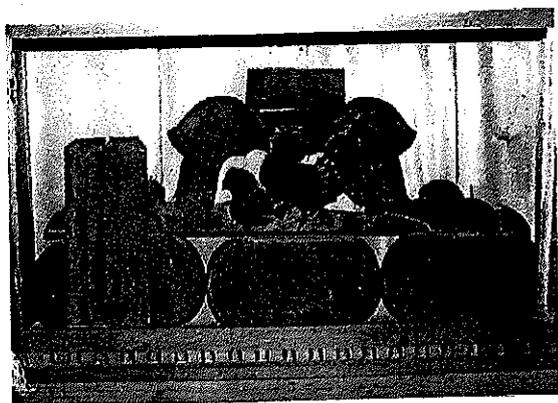
公弁法親王の御作にして、足利尊氏將軍、陣中に奉祀し戦勝並びに人馬の安全を祈願し、靈効を顕わしたりと言えり。のち当多聞寺に安置せるもの也。

○ 鶏一对(左甚五郎作 日光の眠り猫の作者)

由緒(多聞寺控帳より)

徳川三代將軍家光の時代、日光山東照宮御造宮の折り、甚五郎が特に自刻し、多聞寺に奉納し、早き

一、栃木部落のはじまり



鴨一对 左甚五郎作



徳川家康



天海大僧正御召の法衣

頃同寺玄関鴨居の上に有りたるものを地方並びに寺院に不思議なる事変が起こりしごとに啼きたる事に  
て今や本堂内正面欄間の中に在る。

○ 菊花御紋章付袈裟並びに紫衣

由緒 (多聞寺控帳より)

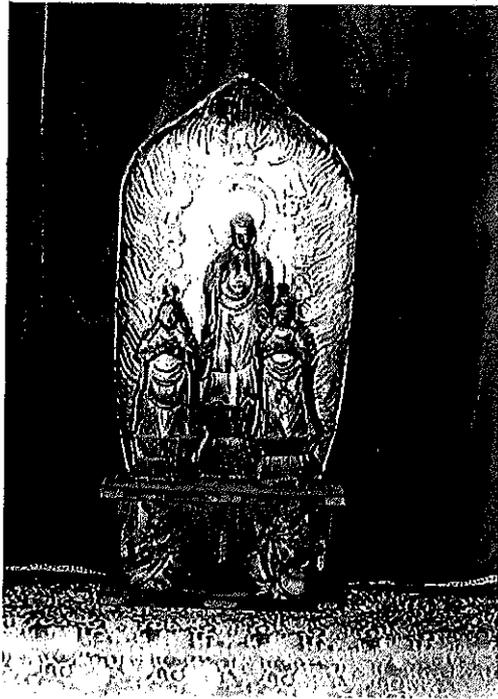
天海大僧正の生前御召しされたもので、皇室が大僧正の徳を讃えて特に御下賜寄進せられたるもの也。

○ 子育観世音 (木像)

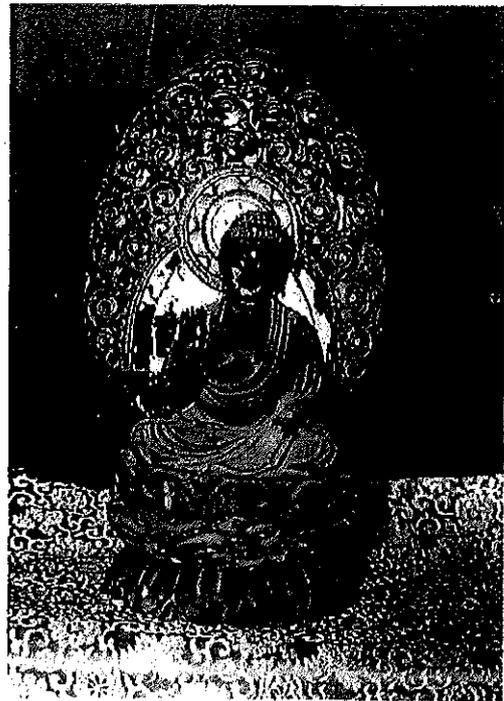
○ 成田不動尊石刷一幅 (狩野安信実筆)

○ 日光山誌五巻 石版刷 (石橋真国、桜井東勝、天保七年九月八日作)

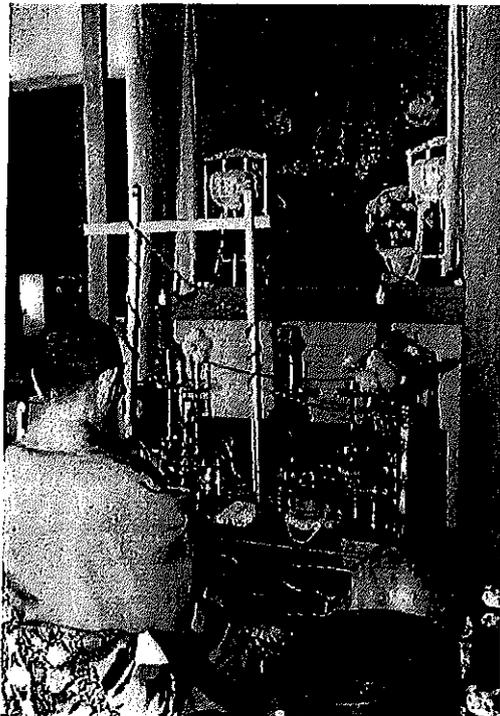
— いずれも多聞寺控帳より —



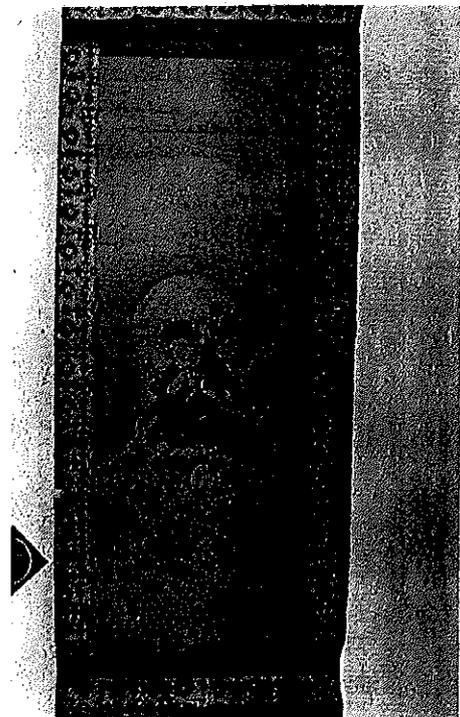
如来三尊仏



釈迦如来座像



現在の多聞寺本堂と毘沙門天像



十九夜尊像の掛け軸

一、栃木部落のはじまり

○ 田中正造翁肖像画（多聞寺控帳より）

明治憲政史上、政治の神と仰がれ、国会開設以来衆議院議員田中正造翁の写真にして、前述の如き水文、二丈六尺余（約七米八〇糎）の大洪水の真最中、内務大臣平田子爵水害実況を親しく視察為したる砌り、同翁が見取図を構成し、詳細に実情を示し徹底的救済方を陳情請願を為しつつある処である。同翁没後直ちに栃木県藤岡町に田中神社に祀れ、明治の佐倉宗五郎と謳われつつあるもの也。

資料（多聞寺控帳より）

○ 寺称

天台宗日光山多聞寺

○ 寺格書

北海道北見国常呂郡佐呂間村字栃木

多聞寺

壹等ニ班列ス

大正二年一月二十五日

天台宗座主 大僧正 不二門智光

○ 移転当時の多聞寺は境内の土地一反歩（二〇a）本堂は八坪七合五勺、庫裡一二坪五合

檀徒一〇九戸

檀徒総代 瀬下六右衛門他七名

初代住職 律師 林田諦氏 御堂完成を見ず遷化す。

御本尊善光寺三尊仏

二代住職 中里昌競氏 大正八年頃赴任し、寺院完成する。

三代住職 疋田亮秀氏

大正九年六月一日 住職

大正九年十一月四日遷化す。

四代住職 中律師 古沢英道氏

大正一〇年 住職

大正一二年 馬頭観世音入仏

昭和九年一九 夜観音入仏

昭和一〇年六月一〇日

多聞寺毘沙門天御本尊入仏

昭和二九年三月二二日遷化

五代住職 中律師 古沢英順氏

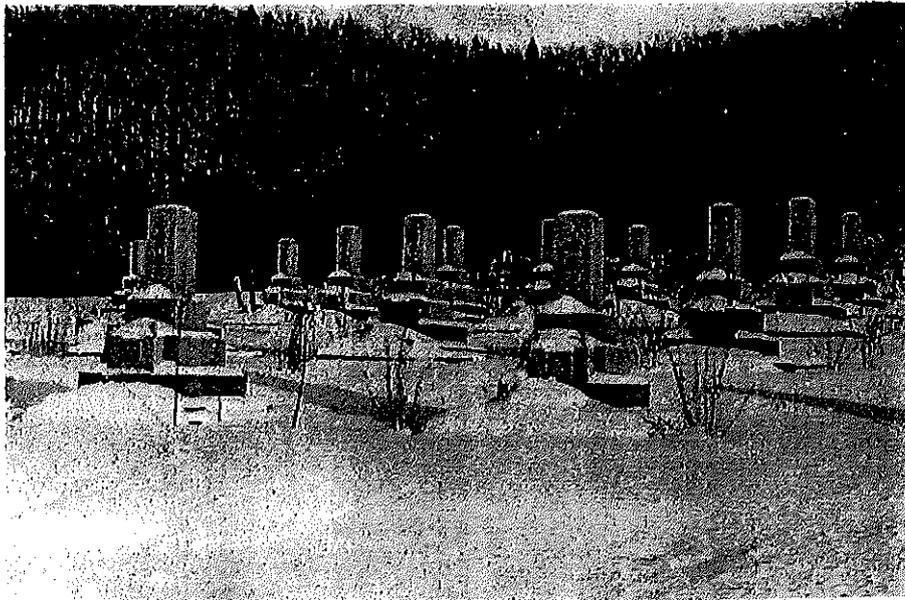
昭和二九年九月 住職

○ 墓地

昭和五年八月調製

墓地台帳 佐呂間村字栃木

管理人 日光山多聞寺住職 古沢英道



現在の墓地

一、栃木部落のはじまり

○ 別院  
墓地は一七九区画あるが昭和五年に当時の青年団員の勤勞奉仕をして立木伐採し整地したものである。

昭和六年五月八日 武士（若佐）入仏執行

日光山多聞寺住職 英道開眼奉修

昭和三〇年栃木県多聞寺へ帰る。

昭和五年七月一三日 佐呂間町字西富、佐呂間火葬場入口に佐呂間供養所、多聞寺別院建立する。

住職 古沢英順氏

○ その他

馬頭觀世音菩薩

所在地 四二五番地

大正一一年七月一五日建立

創立者 古沢英道氏

祭日 七月一五日

昭和三三年四月二七日改築

寄付金 九七戸 三万二千五百五十円也。

幟奉納

大正一二年七月一五日 願主講一同

昭和初期 阿部武二



大正十一年建立の馬頭觀音堂

昭和三〇年七月十五日 遠藤勇作

馬彫刻掲額奉納

昭和九年四月三〇日

奉納者 豊田秀雄、井上与造、十亀実助

原木寄贈者 鈴木徳次郎

下絵 山下源松

彫刻 岩泉定雄

世話人 松本亀之助、越智荒太、関口兼吉

#### (4) 歌舞伎 (大正二年)

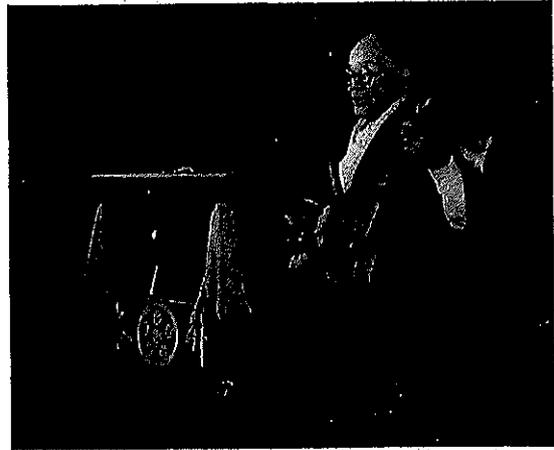
栃木農村歌舞伎の創始者は、川島平助氏だった。

川島平助氏は、明治七年、栃木県下都賀郡谷中村に生れる。一七才で谷中村の演芸団に参加、二〇才で東京名代市川猿之助の弟子、市川猿作に入門、修業を積み、東京歌舞伎役者の免許状を取得するという。そして、その後三年間、大夫元として地方巡業に出ている。そんな彼にも、身近の変化が起きた。明治四四年四月、彼は、北海道移民団に加わり栃木第一次入植者として、開拓の鋤を振うことになったのである。しかし、開拓者としての彼にも、往時の歌舞伎は、忘れられずにあつた。大正二年、栃木幹線道路四一号の完成祝いの祝賀会で部落の青年達に歌舞伎を指導して興業した。これが、栃木農村歌舞伎の始まりになり、各地方での興業につながっていくのである。



現在の馬頭観音堂

一、栃木部落のはじまり



主宰 川島平助さんの浄瑠璃

これに要した費用は、川島平助氏に負うことが殆んどだったといわれている。かつら、脚色、台本、鎧は彼自身が作り、衣裳等については、

三浦芳子夫人（喜四郎の妻）が協力したという。昭和時代に入り、衣裳の修理、かつらの髪結い等は、柿沼利平氏夫人が協力した。また、栃木では、年二回の祭り（春、秋）の折り、神社境内に小屋がけをし、部落、青年団の奉仕によって興業が行なわれた。

このように、川島平助主宰による歌舞伎は、各地の農村の娯楽に大きな役割を果たしていったのである。

その時代の青年達に、農作業の余暇を利用し、歌舞伎を指導し、当時、娯楽の少ない部落に、唯一の農村娯楽として定着させたのである。大正二年、初興業以来、半世紀に亘り部落を始め、近隣部落の農村娯楽に貢献して来たが、主宰川島平助氏も老令となって三味線引きが不可能となり、部落の芸能も借しまれつつ消滅したのである。

○ 演じた役者

大正時代

- ・川島平助（指導・三味線・浄瑠璃）
- ・前田竹清（女形）・関口兼吉・佐高義高兄弟・桜井幸吉
- ・遠藤弥三郎・阿部新一（女形）・大島未藏・渡辺シズエ（子役）・松本熊次

昭和時代（戦前）



高田さんの口上より



昭和初期の歌舞伎上演



昭和二十年 青年団歌舞伎

・高田又助・渡部駒吉(女形)・石川長次郎・峯崎峯吉・岡部伝次郎・小林弘・関口ミドリ(子役)  
 ・松浦槌太郎・豊田孝一・阿部武二・阿部文三・兼頭文太郎(女形)・峯崎市太郎・田中菊造  
 ・谷口義雄・谷口桃一・武方幹一・山下徳松・田畑定・松本清吉・石谷悦子(子役)  
 昭和時代(戦後)

○ 祝賀会・祭典等の出し物の主なものを挙げてみると、

・伽羅千代萩・絵本太閤記・一の谷嫩軍記鶉越・仮名手本忠臣蔵・鎌倉三代記・奥洲安達原  
 ・義経千本桜・壺坂寺場

○ 現存するものの台本として奥州白石噺など五五篇がある。

・伽羅千代萩・絵本太閤記尼が崎段・八陣守護・時雨之炬燵・傾城阿波鳴門・菅原伝授手習鑑・絵本太閤記・一の谷嫩軍記鶉越・仮名手本忠臣蔵・加賀山藩錦絵見・朝顔日記宿屋・鎌倉三代記・彦山権現誓助劔・新版リヤ王劇・釜淵隻級巴・恋娘音八丈・四谷怪談・蝶花形名歌島台・花雲佐倉曙・松五郎乃段・朝顔日記・卅三間堂由来・奥川安達原・神靈矢口渡・絵本増補玉藻前旭袂・義経腰越状・義士忠臣蔵平仮名盛衰記・義経千本櫻・壹坂寺場・祇園礼信仰記・将門忍夜孝事寄

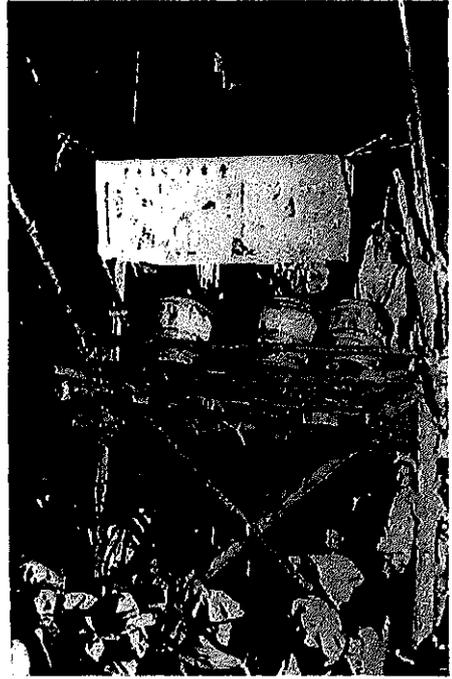
## (5) 八木節

部落に八木節踊りが始めて行なわれたのは、記録がないので、定かでないが、古老の話しを総合すると開拓当初より行なわれていたようである。

現在の様に仕立人と踊り子による組織的なものではなかったが、開拓のきびしい毎日の中で、疲れた心身を慰やすためと、未開の地にあつて遠く故郷を偲び、母県で覚えた八木節を唄い、踊ったという。この八木節が、栃木部落の芸能として定着し盛んになって来たのは、大正一〇年以降だともいわれている。この頃になると、開拓も進み、部落民の生活も安定して来ていた。栃木県出身の阿部武二、柿沼利平の両氏が内地の軍隊に入隊し除隊後、本場で八木節を取得し部落に帰り広めたとも言われている。

いずれにしても当時の部落には娯楽と言えば、農村歌舞伎が主であったが、八木節が盛んになって来てからは、歌舞伎と同様、春秋の祭典には、神社境内で、お盆には多聞寺前庭に於て踊り明したという。

## 一、栃木部落のはじまり



昭和初期の盆踊り風景

当時の仕立人は、鼓が阿部武二、渡辺乙吉の両氏、  
笛が川島清、大島の両氏、大鼓が柿沼利平氏、石川長  
次郎氏、唄（音頭）は今泉米次郎、渡辺駒吉の両氏等  
で編成され、八木節踊り、栃木踊りの一時代をつくっ  
たといわれている。

その後一世から二世、三世へと、栃木部落の郷土芸  
能として受け継がれ、昭和五七年一月には、北見NH  
K三〇周年記念放送に出演し、広く管内に紹介された。

技術程度を高めるより集約的作物（てん菜・食用じゃがいも・はっか等）の導入をはかるべきである。

- (3) 土地生産力が低いにもかかわらず、土地改良に投資する意欲が低いので積極的な改良を行うべきである。
  - (4) 傾斜地・山間地帯が多く、耕地拡大が困難であるが草地としての積極的活用をはかるべきである。
  - (5) 本地域は管内の山村地帯として自他とも認めているが、山村の大部分が国有林地であるが、民有林も一〇〇〇ヘクタール有しているので、これが撫育をはかり、山林収入を上げるよう努める必要がある。
  - (6) 経営規模の零細な農家にあつては、農業経営部門のみには所得の増大が期せられないので、努めて協業による労働生産性を高め、余剰労力の燃焼方法を積極的に開拓し、農家所得の向上を期すべきである。
- なお、気象条件からみた冷害の状況や開拓当時から冷害の苦しみの中で、今日の酪農を築いていったようすについては前出の通りである。

### (3) 母県からの救援

『明治四四年四月二二日に、栃木県下都賀郡藤岡町ほか六か村六六戸、二〇〇余人がオホーツク海の寒風をまともにうける北海道もさい果ての、荒涼たる原野のまっただ中に、千古オノを知らぬ巨木や熊ザサを切り払って開いたもの。現在百数戸、六百数十人を擁し、各般の施設も整い、佐呂間町内の大部落として発展しているが、その開拓は命がけて喰うに食なく、野草を採ってわずかに飢をしのご、着るに衣なく、着のみ着のままでクワをふるうなど相次ぐ困難を野州魂で乗り越えたのだった。』と栃木県の下野新聞は、入植五〇周年を迎えるに当たると、昭和三五年三月二八日の新聞で報じている。

又、その中で下野新聞社（宇都宮市）は、入植当時からいろいろの方法で慰問、激励を続けてきた関係で、

## 五、戦後立ち上がる人々

五、昭和三二年栃木県の塩原の大火には二万数千円を、また峯崎氏上京のさいは大豆六俵を恵まれぬ子らの施設に下野新聞を通じて贈るなど、海山遠くへだつとも、兄弟の血は水よりも濃くじかに触れ五十周年を経ていよいよ温かいものがある。



栃木県より続々と寄せられて来た救援物資

部落一同からの招待があつて、入植五〇周年記念式典に福島社長が参列して、お祝いと激励のことばを贈ることになつていと書かれている。

栃木部落と下野新聞との関係は、長く深いといわれその状況について、次のように述べている。

一、明治四四年四月七日、小山駅から出発した移住団一行を見送る。慰問品を贈る。

二、大正二年の冷害凶作で栃木県庁に再救済を願ひ出るや、率先して義損金を支出する一方、県民に呼びかけ三百七十余円を贈った。

三、大正一三年、栃木神社の拝殿落成に当たつて巾三尺、長さ三十尺の大ノボリ二本を寄贈した。

四、昭和二九、三〇、三一年の連続三年の凶作には、義損金を広く県下から募集し現金百十万六十余円、物品、米四十七名、衣類三千五百点を送つて激励した。

三一年の冷害にも多くの義援金品が届けられているが、同部落は三十五年五月に開基五十周年式典をあげたとき、下野新聞の福島社長夫妻をはじめ県代表を招いたことがある。この郷土愛に燃える美談は暗い冷害の町に明るい話題となっている。

#### (4) お礼の文集

この冷害義援金品の中に、多くの学用品もあつてこれらは栃木小学校の児童に配分されたようである。栃木県民の皆様へと児童のお礼の作文が、「しらかば」という文集にまとめられて、おくられたものと思われる。その中から代表的なものを述べてみたい。

極寒のみぎり、津軽海峡を遠くへだてた貴県下とは申し乍ら、しのぎ難い毎日のことと存じられ、日々厳寒の連続で御座います。

さて、昨年の本道一帯の冷害凶作に對しましては、昨年暮より今年当初にかけて、県下数多くの学童の皆さんより、本校の児童達に金品の数々、並びに多数の激励文を頂戴致し、学童の方々の温いお心と、この背後にある県民各位の善意と愛情に溢れた御厚志に對し私共職員は勿論、子供達も心から厚くお礼申し上げます。次第です。

当地は、本道東部に位する佐呂間湖畔より約二十軒の南北に長い山間の部落、五十有余年前栃木県よりの



畜産経営の進展に大きな役割を果たしたものである。

## 8、栃木県への集団帰郷

### (1) 帰郷運動の実現

栃木部落在住の栃木県人会の人達一三戸による、母県である栃木県に帰郷すべく請願運動をおこしたのは、昭和四六年春四月一八日である。

栃木県議会議長宛てに「渡良瀬川流域土地貸下げ請願書」を提出した。

話は今を溯ること七二年前、日本公害の原点とも云われる、明治四四年の栃木県足尾銅山鉍毒事件に端を発し、農民たちは足尾銅山から流れ出る鉍毒と渡良瀬川の長年にわたる洪水に悩まされた。その被害は、流域の農作物を始め漁具類にまで及んだ。

その頃、栃木県選出国會議員田中正造氏は、時の帝国議會に足尾鉍毒事件として、栃木県下都賀郡南谷中村六か町村の農民を代表してその実情を訴えた。そのため官憲と農民の激しい闘いが続けられたが、結局谷中村（現在の藤岡町の一部）を廃村し、遊水池にして渡良瀬川の水流を調節して、鉍毒を食い止めることになった。

その結果、谷中村の農民達は先祖代々からの土地をうばわれることになり、やむなく、谷中村を中心とした渡良瀬川沿岸の関係農民のうち希望者を募り、瀬下六左衛門氏を団長として、第一次移民団六六戸（二三七人）が、明治四四年四月七日栃木県小山駅から臨時列車で出発した。「水場」の貧しい暮しから、北の果て北海道に別天地の夢を抱いて旅立ったのである。



帰郷最年長者 佐瀬のばあちゃん 老人クラブの送別会

途中、青森港で船火事にあい、春まだ深い残雪のある留辺蘂峠を越え、慣れない道中苦勞に苦勞を重ねて、栃木部落に第一歩を踏んだのが、明治四四年四月二一日である。

うつ蒼たる密林に入植し、慣れない開拓のため開墾早々、栃木県に帰りたいたと云う者も何人も出る始末である。粗衣粗食に耐え苦難の道をたどりながら、開拓移民の一世達は、遠く郷里の栃木県を偲びながら、冷害凶作と大雪と貧困と闘い、栃木部落の開拓のために一生涯を終えたのであった。

最初の帰郷請願運動は、昭和二二年川島平助氏を中心に「渡良瀬川遊水施設地貸下願」を栃木県知事宛に提出したのが始まりである。当時は昭和恐慌といわれ、失業問題、小作争議がおきていた。

川島平助氏等は、渡良瀬川遊水池を「天恵の耕地出現」と喜び、栃木県知事へ「当地に於ける将来への見込みは全くない」と訴え、「現在は家族も増加し、生計容易ならず候、況んや子孫の教育上困難なるは勿論に有り、昨今は処置に苦慮中の有様にて御座候」と述べ、二男三男対策も含めて遊水池を貸下げてもらえるよう請願をした。だが、この請願書は県知事の手許までは届かず途中で握りつぶされる。

そこで、翌一三年嘆願として再度請願書を郵送する。しか

し、日中戦争によって運動は停止し、昭和一九年三度目の帰郷運動をおこす。この時も「遊水池貸下げ」を栃木県知事に請願する。代理人に足利市助役となった大貫権一郎氏になった。だが、大東亜戦争中であり栃木県では、食糧増産のため満蒙青少年義勇軍の内原訓練所へ遊水池を利用させようとしていたので、請願はつぶされたのである。

明治四四年に北海道開拓にと栃木県を追われた人達の請願は、すべて拒否されて来たのである。再三に亘る請願運動が何一つ稔らず、望郷の思いを抱いて開拓地栃木部落に骨を埋めた移民一世の夢と願いを受け継ぎ、栃木県人一三戸は昭和四六年四月一八日付で、四度栃木県知事に対し「渡良瀬川流域土地貸下請願書」を提出した。代表者は川島清氏である。栃木県小山市の版画家小口一郎氏が側面より協力してくれた。これが栃木への入植から六〇年の歳月が経っている。

帰郷運動が具体化して来たのは、国内に於ける公害問題が社会問題としてクロージアップされて来た時代だった。栃木県人の帰郷運動が大きく話題になり、各新聞社及NHKをはじめとする放送機関等のマスコミが、部落に押しかけ平穏であった栃木部落が一変して、騒然のうずと化したのである。

栃木県人一三戸全戸が帰郷請願をしたが、それは運動として全戸が署名したことであり、署名とは別に実際には帰郷を迷っている者、又希望していない者など様々であった。マスコミは栃木部落の実態を報道するのではなく、「佐呂間栃木地区は現在でも熊が頻繁に出没する山の中で、将来の生活もなりたない僻地」と誇張して報道し、又既に離農跡のこわれた廃屋や未開の荒地などの写真をとり、今だに原始的な営農方法しかとれないなどと、新聞、テレビに報道したため全国的に大きな話題となった。

こうした報道は、栃木県人でない部落民にとっては迷惑千万なことであった。この部落に定着し、農業を



住みなれた我が家を後に

続けようとしている後継者の結婚にも大きな影響を及ぼした。当然、感情的な問題に発展していったのは言をまたない。部落内の意見も二つに分かれて、重苦しい雰囲気になって来たのであった。

帰郷運動をした人達も又帰郷が実現出来たとしても、現在所有している土地の売却が出来るかの問題、帰郷してからの将来の問題、如何に望郷の念にかられたとしても、過去六〇年心血を注いで開拓して来た土地、自分の天職として汗水を流し努力して築き上げて来た農業を、いざ離農するとなると一抹の淋しさと不安

に、安眠出来ぬ夜もしばしばあったのではないか。

最終的には、栃木部落をはなれて母県へ帰郷したのは、帰郷請願者一三戸のうち六戸であった。

昭和四七年二月二三日部落民、町、農協の関係者をまじえて、栃木公民館に於いて送別会を催した。この時も報道関係者は、この様子を取材しようと大挙押しかけて来て場内に入ろうとしたが、部落民が拒否をして場外に締め出す一幕もあった。

同年三月八日、春とは言え寒気のきびしい日、六〇年間喜怒哀楽をともした部落民、六〇年間苦難に耐え築き上げた栃木部落と別れを告げる帰郷者の旅立ちである。部落民多数が公民館に集まり、残る者、行く者共に涙を流しながら送別の挨拶を交す。近親者や近所の人達が遠軽駅まで見送り、遠軽駅



昭和 47 年 3 月 8 日 部落民と別れを惜む帰郷者達

構内より流れる蛍の光の吹奏に送られて、開拓以来、実に半世紀以上に亘る栃木部落での生活に終止符をうったのである。

## (2) 帰郷者の状況

さて、栃木部落を出て母県に帰った帰郷者達はその後どうであったか。栃木県側では、帰郷者対策として家賃の安い住宅を提供して、就職の世話をしようとして約束した。

帰郷者達は母県に夢を託して帰郷したが、そこは希望していた渡良瀬川沿いの土地ではなかった。とりあえず壬生町の雇用促進住宅に落ちついたのである。壬生町の雇用住宅に約一年位いて、その後栃木県知事の斡旋で、石橋町下古山にある日産自動車KK所有の土地の分譲を受け住宅を建設する。

仕事は壬生町にある玩具工場や栃木町にあるハム工場等に就職をした。

帰郷運動の主旨通り、栃木県側が受け入れ約束をどのように履行したのか、帰郷者達は多くを語ろうとしない。帰郷して落ちついた土地は、希望していた谷中村周辺の地ではなく、石橋町に帰郷者中四戸が住宅を新築をした。あと二戸は少し離れたところに建売り住宅を求めて、お互いに助け合いながら生活を営んでいる。



帰郷直後 先人の故郷の地に立つ帰郷者達

現地の人達は北海道部落と呼び、帰郷後一〇年を経過した現在、皆が集まれば佐呂間町栃木部落の話が出て来る。やはり自分達の手で苦勞して開拓した土地、人生の半生以上も過した栃木部落は、遠く離れてみれば、帰郷した中年以上の人達にとっては故郷なのであろう。

### (3) 帰郷後における栃木部落の影響

#### と進展

昭和四六年から四七年にかけて、帰郷運動とマスコミの報道により、全国的に世論の注目の的となり、真実と偽報の交差する中で、栃木部落に及ぼした影響は大きかった。後継適齢期の花嫁問題、生活営農意欲の減退、報道に対する不信と部落民の怒り等大きな問題が残された。

部落民は何時でも意気消沈してはいなかった。帰郷問題のマスコミ報道で、全国的に悪い印象で知れ渡った部落を、一日も早く回復をしようと立ち上がったのである。昭和四七年を新生栃木の始まりとして、残った部落民が一致団結、お互いに力を合わせ部落の発展と本当に豊かで住みよい地域を建設しようと誓い合ったのである。

帰郷者達の所有地は、殆んど部落内の人達が引き受け、経営

規模拡大をはかり集団水田転作事業により、乳牛及び大型機械の導入、第三次酪農近代化事業による大型サイの建設、大型トラクター及び作業機械等の導入をはかり、酪農経営の基盤も出来て着々とその成果を挙げつつある。

昭和四五年より始まった道営畑綜事業により、未開地を耕地に改良、栃木道路改修による舗装化（現在一部舗装）更に、国営による三面ブロックの武士川の改修も間もなく完了する。乳牛の増加による飲用水の確保も、栃木部落の清流を全町にまたがる営農用水として使う事になり、五七年には通水の目途もたち、名実ともに酪農の部落栃木に生れ変わったのである。

マスコミ報道による部落が受けた悪影響も、部落民一人ひとりの努力によって次第にうすれ、部落民の気持ちにも落ちつきと余裕がみられるようになった。

栃木部落開拓の先人達が幾多の苦難に耐えながら、一畝ひと畝開墾したが何の娯楽もなく、苦しい開拓に専念した日々の中に、ただ一つ疲れた心をいやす「八木節」を唄い踊たと言う。

この尊い部落の文化、郷土芸能八木節を長く後の世まで保存しようと、開基七〇周年記念事業として、保存会を結成した。開拓先人達の労苦に報ゆるべく努力しており、開拓の守り神として迎えた神社も毎年春秋には祭社する。

日光山多聞寺も壇徒の寄進と部落民の協力により昭和五三年、本堂の大改修と庫裡・納骨堂の新築をした。栃木部落の中央を仁頃山に向って垂直に伸びる栃木幹線道路、その左右の山々の裾まで、夏ともなれば緑のデントコーン畑や牧草畑が広がり、放牧された乳牛が緑の牧野に散々といるのでかな風景である。広々とした甜菜畑や小麦畑のなかに点々と新しい大型サイロや近代牛舎が見える。

国道三三三号線より栃木部落の入口に立つと、正面に堂々とした仁頃山がそびえ、部落民を見守っているようにみえる。農村の代表的な僻地過疎の部落と全国に報道されてから一〇年を経た今、部落民の努力により実に豊かで平和な部落である。一戸平均約二〇ヘクタールの耕地を所有する酪農の部落として生れ変わったのである。過剰投資気味であった経営経済も除々に解消し規模拡大の効果も出て来た。農業経営の充実にともに、農家の後継者も次々と定着し部落の将来に大きな望みももてる。

昨今は、牛乳の生産調整、乳価の据置き、資材の高騰等農業をとりまく情勢は誠にきびしいが、このよきな情勢に耐え、部落民一人ひとりが知恵を出し合い、限りない未来への発展に意欲を燃やし、部落民が固い団結のもと懸命の努力をしている。

## 9、栃木部落開基五〇周年記念事業

明治四四年四月二一日、栃木県から六六戸、二四〇名の入植以来、幾多の苦難を克服しながら五〇年の変遷を経て、昭和三五年四月二一日栃木部落開基五〇周年の輝かしい年を迎えた。

栃木部落においては、入植以来老人の労苦を偲び、今後部落の一層の発展を期するため、栃木部落開基五〇周年記念協賛会（会長・峯崎辰蔵氏）を設立し、記念式典並び祝賀会を挙行することになった。

当時についての詳しい資料が乏しく定かではないが、少ない記録をみると盛大な記念式典・祝賀が催されている。

記念式典については、遠く栃木県より栃木県知事代理・横田新兵氏、宇都宮市下野新聞社・福島社長御夫

妻、小林、石川両特派員の各氏が臨席する。町内では、町長をはじめ議会議員、教育委員会、農会、共済、乳業会社、精糖工場、病院長、郵便局長、小中学校長、営林署等の代表者五〇余名が列席していることからみて、如何に盛大であったか伺い知ることができる。

式典では、栃木県知事横川信夫氏の祝辞、下野新聞社下野会会長坂田惣一氏の激励文の披露があった。この激励文を掲載すると次のようである。

#### 激励文

万花爛漫の北海道佐呂間町栃木部落が、本日入植満五十周年記念式典を挙行致しますことは、遠く離れた故郷の地栃木県百六十万県民の等しく御慶びいたす処であります。

特に、我々下野会員は、郷土を代表する下野新聞に携る県下全域に亘って、各地に販売網を以って有する店主を以って構成して居ります関係から、あなた方のお父さん、お母さん方が、明治四四年四月二十一日に御当地に入植されました当時の模様を克くに存じております。

したがって、吾々郷土人と繋りを持つあなた方、栃木部落の長く久しい間の御苦勞に対し、常日頃大きな関心を以って見守って居りました。

茨の道を五十有年の御苦闘に依って、今日この祝典を迎えられました皆様に対し心からなる尊敬の意を表したいと存じます。幸いにもこの祝典に下野新聞社長福島悠峰氏が御招待されますので、社長に托し心ばかりの御祝品を御贈り出来ました事を喜ぶもので御座います。

今後共、どうぞ益々御健闘の上、野州魂の如何なるものであるかを大いに誇示して頂きます様期待いたす

次第で御座います。

皆様の御奮闘は下野新聞に依って、将来も報道されることを確信致しますが、どうぞ永遠に境墓の地をお忘れすることなく交友を続けて頂きたいと念願いたしております。

終りに栃木部落の皆様の御健康と御多幸を御祈り致します。

昭和三十五年四月二十一日

栃木県宇都宮市池土町三〇〇三番地、下野新聞社内下野会

坂田 惣一郎

外会員一同

栃木部落祝典会長殿

以上のような部落に対しての激励文が寄せられ、更に記念式典祝賀品として次のような品々が寄せられている。

- |               |      |              |      |
|---------------|------|--------------|------|
| 一、入植五十周年記念碑題字 | 壹基   | 栃木県知事        | 横川信夫 |
| 一、櫓の木(苗)      | 五本   | 三嶋山文化保護委員会代表 | 中山善重 |
| 一、栃の木(苗)      | 七本   | 岩舟村林商店       |      |
| 一、御神霊         | 壹百拾基 | 日光二荒山神社      |      |
| 一、御護摩札        | 壹百拾基 | 日光輪王寺        |      |
| 一、御守護札        | 四種類  | 今市市二宮神社      |      |

六、進みゆく酪農への道

一、家康公訓 壺百拾個 日光東照宮

一、干瓢(一〇メ) 壺 宇都宮市下野新聞社

一、干瓢(二六キロ) 壺 宇都宮市

一、清酒正宗菰冠り 壺 宇都宮市下野会

一、醬酒(二本瓶) 五十本 藤岡町岩崎醬油株式会社

一、本宮羊羹 百本 本宮製菓KK 橋本善英

一、益子焼湯呑 五十個 栃木県陶磁器商工協同組合

そのほかにも絵はがき等数点、栃木県各地から祝賀品が贈られて来ている。

下野幌新聞社と部落の関係については、冷害と救援の主文の中で述べてあるとおり下野新聞社と部落の結びつきは深い。

式典では、協賛会長より開拓功労者の表彰が行われた。表彰を受けられた方々は次の通りである。

瀬下六右衛門、川島平助、小林ヤイ、峯崎ナツ、阿部トメ、田中アキ。

このように、五〇周年式典は盛会裡に終了した。その後、五〇周年の記念事業として「入植者の言葉では言い尽せない労苦を後世に永く伝え、その努力を讃えよう」と、部落の総意により記念碑の建立をしたのである。記念碑の題字は栃木県知事が、碑文は下野新聞社福島社長が書き、立派な記念碑となった。

部落民も五〇周年を期して先人達の労苦を偲び、北海道に「栃木部落あり」の名をあげようと固く誓い合ったのである。

K211.1

# 栃木のあゆみ

昭和五十七年六月一日発行

発行者 栃木開基開校七〇周年記念協賛会

編集者 栃木部落史編集委員会

発行所 常呂郡佐呂間町字栃木

印刷所 協業組合 高速印刷センター

札幌市西区手稲稲穂四七二一〇